



団長・ヴィタリ神父

今から十五年前の九月五日夜七時過ぎ、当時は広島に住んでいた娘から突然、電話がかかった。

「お父さん、サビエル記念聖堂が燃えてるよ！テレビで中継してるよ!!」

それから二時間余り、九時半ごろだった

か、正面の建物が崩れ落ちる瞬間が映し出され「キヤート」という悲鳴が画面から聞こえた。

信者だけでなく、広く市民・県民から親しまれた聖堂だった。多い時は年間百組以上がこの聖堂で結婚式を挙げ、そのほとんどは未

信者だった。

焼失した時の山口教会の主任神父が、今回の巡礼の旅の団長、ヴィタリ神父である。

焼失の翌年、山口・島根地区全体の責任者(地区長)となり、聖堂再建へ神父の奔走が始まった。

それから七年。一九九八年に今のサビエル記念聖堂が再建された。

多くの人が焼失前の聖堂と同じ型のものが再建されると思っていたが、ヴィタリ神父が

考えたのは、過去にとらわれたい、現在にマッチした記念聖堂であった。

反対の声もかなりあったが、ねばり強く話し合い、神父への個人的信頼もあり、当初の設計通りに完成した。

ヴィタリ神父はサビエル記念聖堂の顔であり、山口市の顔でもあった。

ドメニコ・ヴィタリ神父。一九三七年、イタリアのアジジ近くで生まれた。アジジは一度訪れたことがあるが、中世がそのまま残されたような魅力的な所で、アジジのフランシスコで有名である。

中学生のころから司祭を志し、アジジの神学校で三年間学ぶ。神学生として来日したのは一九六四年。六年後の一九七〇年に司祭に叙階された。

その後、山口教会や

地区長として活躍し、もう十年以上も放送しているKRYラジオ番組「サンデー・ゴスペル」(日曜朝七時四十五分から十五分間)も

ヴィタリ神父が中心になってスタートした。神父としてだけでなく、幼稚園の園長としても子供に慕われ、現在も周南小きき花幼稚園と下松の星幼稚園の園長でもある。

子供が好きで、巡礼中も子供を見掛けるとすぐ話しかけ抱き上げる。百八十二才、九十

八の巨漢だが気持ちの優しい神父である。私が地区の役員をしていた時「近くて遠い韓国」から「近くて近い韓国」に若者の交流を始めようとヴィタリ神父と韓国を訪ねた。

当時、日本の教科書の記述を巡って反日感情が強く、ソウルではタクシーに乗ってヴィタリ神父と話を始めた

ら、突然、タクシーが止まり「日本人は降りろ!!」と降ろされた。今も日韓関係は時折ギクシャクするが、私たちの訪韓から交流が

山口放送のスタジオで番組の打ち合わせをする神父(右)



始まり、二十年以上たった今も、学生たちの交流は続けられている。

今年は韓国の学生たちが来日し、徳地の少年自然の家で七月二十九日から日韓合同キャンプが開かれるが、日本側の責任者は今もヴィタリ神父である。

歴史問題で複雑な国民感情もあり、もし日本人神父であったら今日まで続けられたろうか。第三国のイタリア人であり、神父の人柄が日韓合同キャンプを今日まで継続させた面が強い。

司祭になる時「清貧・貞潔・従順」に生きるといふ誓願を立てたと言われるが、まさにその通りに生きておられ、これは聖職者だけでなく私自身への問い掛けでもあり、巡礼の旅のテーマでもある。(前山口放送取締役ラジオ局長)



再建されたサビエル記念聖堂



焼失前のサビエル記念聖堂